

2026 AUTOBACS SUPER GT Round3
MOTEGI GT 250km RACE

apr LC500 h GT



2026 AUTOBACS SUPER GT Round3 MOTEGI GT 250km RACE

開催地：モビリティリゾートもてぎ（栃木県）／4.801km

11月6日（専有走行）
天候：晴れ　コースコンディション：ウエット／ドライ

11月7日（予選／決勝）
天候：晴れ　コースコンディション：ドライ　観客数：24,000人

apr
Racing Constructor

5番手発進が一転、スタートで混乱を招き、オープニングラップでリタイア

2026年シーズンも佳境を迎え、今年のモビリティリゾートもてぎでは土曜日にセパン大会の代替として行われる第3戦、日曜日には第8戦と、2連戦での開催となる。公式練習は金曜日の午前、土曜日と日曜日はいずれも午前中に20分間の計時予選、午後に250kmの決勝レースという変則的なフォーマットになる。

31号車 apr LC500h GTは、トップと33ポイント差のドライバーランキング13位で、この2連戦を迎える。優勝で25ポイント、ポールポジション獲得で1ポイントが加算されるため、最大で52ポイントを稼ぐことができる。2戦連続でのポール・トゥ・ウインを果たせば、ランキング上位が射程に入ってくる計算だ。ただし、土曜日の第3戦では40kgのサクセスウェイトを積み、決して軽くはないハンデを背負っての戦いとなる。なお、日曜日の第8戦は全車ノーウェイトだ。

ストップ＆ゴーサーキットのもてぎは、リヤのトラクション性能が高いMR（ミッドシップエンジン・リヤドライブ）やRR（リヤエンジン・リヤドライブ）車両が得意とし、FR（フロントエンジン・リヤドライブ）車両には厳しいコースだ。それでも、唯一のハイブリッドシステムを搭載する31号車は、ブレーキングでの回生とモーターアシストによる加速を最大限に活用できる。そこに活路を見いだし、シリーズ逆転への望みをつなぐ2連戦に挑む。

専有走行／13位　11月6日（金）9:30～11:10

事前の公式車検ができないことから、レースウイークの初セッションは金曜日の専有走行として行われた。9時時点の気温は、公式発表こそないが19度前後と暖かく、晴天ながら一部にウエットパッチが残るため、ウエット宣言が出された。



31号車は路面コンディションが向上するのを待ち、開始から7分ほど経ってから小高がコースイン。4周目に1分48秒465をマークして、7周でピットに戻った。ここでコース上のボラード修復のために赤旗中断となり、この時点で順位は8番手につけていた。

9時55分に再開すると、再び小高がコースへ。13周を終えて小山に交代し、FCY（フルコースイエロー）練習のタイミングでもピットインを繰り返して、セットアップの確認と微調整を続けた。

17周目からは再び小高がステアリングを握る。このとき、タイミングモニター上では22番手だったが、21周目に1分48秒015を記録して12番手にジャンプアップ。翌周ピットに戻り、小山と交代した。

小山が走行したのはGT300クラスの専有時間帯。タイヤがユーズドだったこともあり、予選シミュレーションではなくロングランをテストした。そのためタイムアップはなく、31号車は13番手で専有走行を終えた。

公式予選　11月7日（土）
5位　9:00～9:20



ワンデー開催の第3戦はノックアウト方式ではなく、20分間の計時予選で争われる。開始時の気温は15℃、路面温度は18℃。前日の専有走行とは一転して、冷たい空気に包まれた。

アタッカーは小高。路面コンディションが改善してグリップ力が高まるセッション終盤のアタックに向け、残り10分強のタイミングでコースに入る。

タイヤ無交換が今季のGT300クラスのトレンドとなるなか、今回は通常の300kmより短い250kmということもあり、無交換を選択するチームはさらに増えるとの見方が強かった。31号車もそれを見据え、やや硬めのタイヤを持ち込んでいる。

小高は低い路温と硬めのタイヤで、じっくりとタイヤを温めていく。そして4周目に最初のアタックを行い、1分46秒249。5周目には1分45秒890にタイムアップし、決勝に向けて5番手グリッドを獲得した。



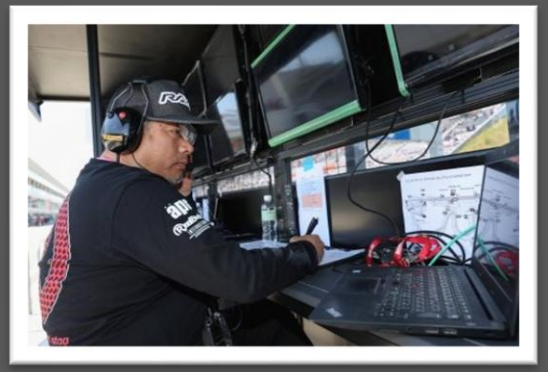




小高一斗選手
「専有走行では、予選時の気温とかなり違うことが分かっていたので、タイヤもセットアップも確定できない状態でした。それも影響したのか、予選ではセッティングにズレがあって……。5位だったので悪くはないのですが、セットアップがうまく決まっていれば、ポールポジションは無理でも、もう少し上は狙えたかもしれないと思うと、ちょっと悔しさが残りますね」



小山美姫選手
「専有走行のFCYの時間帯で乗ったときは、マップとかの調整をしていたのでアウト、インを繰り返していました。最後はロングランを少しテストして、そこでのバランスは悪くなかったので、決勝に向けては良い感触をつかめたと思います」



金曽裕人監督
「専有走行では持ち込んだ2種類のタイヤをテストして、決勝でのライフや、もっと低気温になったときにどうするかを試していました。予選は、僕のミスで予選セットにアジャスト出来てなかった。かなりピーキーだけど、小高選手なら乗りこなして一発のタイムを出せる予選専用セットではなく、決勝セットに近い状態でした。小高選手には申し訳なかったです。それでも5番手で帰ってくるんだから、さすがですね」

決勝レース（50周）／リタイア　11月7日（土）14:06～15:44

天気は快晴。フォーメーションラップが開始された14時のコンディションは、気温19℃、路面温度22℃に上昇していた。

31号車のスタートドライバーは小山。2周のフォーメーションラップで、タイヤをウォームアップしていく。しかし、2周目の90度コーナー立ち上がりで、前を走る4番手の車両から離れてしまった。グリーンシグナルで前方の4台がスタートを切っても31号車は加速せず、後方が密集した状態でコントロールラインを通過していった。

そこからはレーシングスピードでのポジション争いになったが、密集は3コーナーまで続いた。そして、3コーナーのイン側を差してきた車両が左リヤタイヤに接触し、31号車はスピンしてグラベルに止まった。

この混乱のなかで、後続車の追突も発生。31号車を含む5台がオープニングラップでリタイアすることになってしまった。

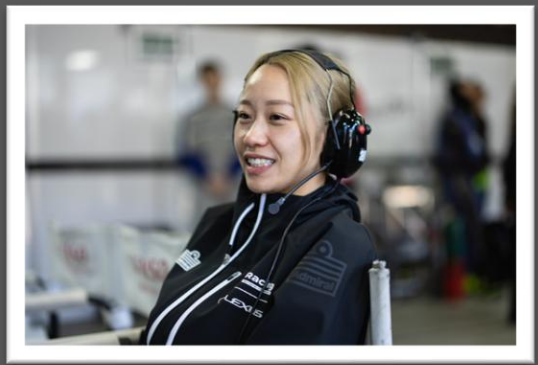






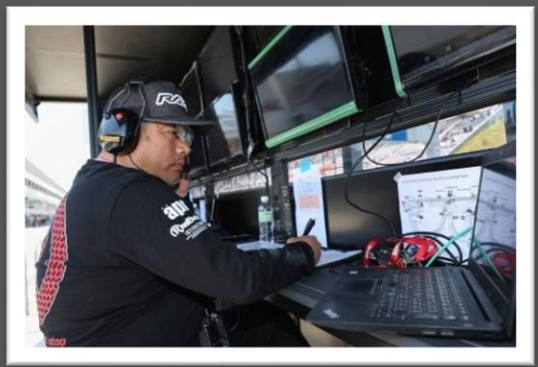
小高一斗選手

「決勝を僕は走ることができませんでした。明日（第8戦）の決勝のためにも、ロングランのペースを確認しておきたかったので残念です。タイヤもクルマも、明日に向けてちょっと不安を残してしまいました」



小山美姫選手

「スタートで混乱を招いてしまったのは私のミスです。スタート前には、いつものように自分のグリッド位置と周囲の車両との前後関係を確認していたのですが、90度コーナー立ち上がりで自分の位置認識が一瞬不明確になり、加速が遅れてしまいました。私が引き起こした混乱が、3コーナーでのアクシデントにもつながってしまいました。全チームのみなさま、ファンのみなさま、申し訳ございませんでした」



金曽裕人監督

「多くのドライバーやチーム、ファンのみなさまを混乱させてしまいました。上位4台に離されたことで、集団のなかの全員が後れを取り戻そうという展開にしてしまい、それがマルチクラッシュの原因になってしまいました。みなさまにご迷惑をおかけし、申し訳ございませんでした」

APR RACING

PARTNERS

豊田通商 TOYOTA TSUSHO
日本化薬
DENSO
COROLLA MIE NETZ NOVEL MIE
Sora・Investment
Shinko
Suzuka Corolla Mie
Matsusaka Corolla Mie
Yokkaichi 伊勢
KYB
KURIMOTO
住友電装
OBERON
DENSO
TAC
SHINNIHON
Castrol
IKEDO archetype
愛知産業
JTB SPORTS
損保ジャパン
東京海上日動
ニエスゴム
モビリティパーツ
OGURA CLUTCH
ADVICS
MOTUL
アイチオート用品
CPC
鈴与レンタカー
LEXUS
TGR-DC
TRD
BRIDGESTONE
RAYS
TOYOTA
TRD
YOKOHAMA

